達者に書いた素描のスケッチで、その反古紙には大宋乾德四年(966)の日附が繰返して習字されてあるから、すでに宋代にはいつてから畫かれたものであること疑いない。これらの例によつて考へると、かゝる畫風は、中唐以後において、從來の遊糸描にあき足らず、それから脱却して、簡潔な筆で感情を寫さうとする革新の流れで、それが內地においては喧傳せられず、わづかに西方邊地になごりを留めてゐるものと見るべきではなからうか。それでは一たいこの畫はいかなる感情を示さうとしてゐるのか、これを的確に知るためには、別に大谷探檢隊が獲て、樹下美人圖の名で知られてゐる畫面を對照させなければならぬ（編者註、圖版第一五圖、左）。

樹下美人圖は喀喇和綽古墳の出土として知られており、その大きさ、構圖、描法などすべての上から見て、この樹下人物圖と相對する左側の對であること、寸分の疑いもない。裏貼りに開元四年の戸籍の殘紙が用ゐられてある。後者と同樣の石と樹とを前後にして、唐裝の美人が侍女を從へた立姿を描いてあり、兩畫面を並べて見ると、男の主從の瞳を右に寄せた視線は、まさしくこの婦人の上に注がれ、女は領巾をはずして、左右兩手の指先で胸から腰のあたりに引つ張りながら、朱唇を開いて男に呼びかけてゐる。兩面畫が一對となつて、男女情會の緊張した場面を寫したものであることを、たゞちに觀取し得られると共に、かゝる情景を、わづかの描線と簡單な色彩とでいかにも遺憾なく畫き出した新しい筆致に感嘆せざるを得ないのである。

思ふにこの一對の畫は、たぶんこゝに葬られた人を忍ぶよすがに、その在世中の情事を寫して、壙內に納めて置いたのであらう。はたしてさうであれば、かうした光景を詩文などとは別に、まのあたりはゞかりなく、繪畫によつて後に傳へやうとする心事に、ほゝ笑ましさを禁じ得ないと共に、中唐以後世態一變の社會思潮を如實に觀取し